

石川県白山自然保護センター普及誌

# はくさん

第19巻 第4号



## ハクサンイチゲ (*Anemone narcissiflora* L. var. *nipponica* Tamura)

この植物は、国内では、中部地方から北の高山帯に広く見られます。県内では、白山の高山帯を中心に生育しておりますが、亜高山帯でも見られます。夏山の初期には、四塚山から三ノ峰にいたる高茎草原の上部でシナノキンバイやハクサンフウロなどと大小の群落をつくり、お花畑を彩ります。

イチゲ（一華）は、一輪の花を意味しますので、一茎に数花をつけるこの花を適確に言い当てた名前ではありませんが、純白のはなびらが一輪草を思わせるところから名付けられたものでしょう。

# 白山麓のアブラチャン



アブラチャンの雄花（平3. 4. 6 吉野谷村）

陽春のそよ風が木々の小枝を揺するころ、やわらかい太陽の光に誘われたアブラチャン *Lindera praecox* は、山裾の斜面や渓谷沿いの崖地にのびしたか細い小枝に、無数につけた小花を開きます。開いたばかりの、この花の優しい黄緑色の花弁と黄色い葯（おしべの先にある花粉の袋）は、まだ、落葉樹が葉を広げていない雑木林ではかなり目立ちます。

## 名の由来

いずれの地域でも、薪炭製造が盛んであったころは、木炭として利用できる樹木はもとより、利用できない小低木にも、それぞれにふさわしい方言が与えられ、地域の人々に親しまれていました。しかし、近年、ここ白山麓でも樹木の用途はもとより、方言を知っている人々が少なくなっています。そして、このアブラチャン（油瀝青）については、方言はもとより和名を知っている人もごくまれです。

アブラチャンの名の由来は、椿油のようにこの木の実から油を採取したことには始まり、油とチャン（瀝青）\*を合わせて名前にしたといわれています。油成分は樹木にもあり、これを火の中に投ざると油をはじくような音を立て煙を上げてよく燃えます。このように生木でもよく燃えるものに、ウダイカンバ、ダケカンバ、シラカバなどの樹皮が知られています。枝もろともよく燃える木は、トネリコの仲間とこのアブラチャンが挙げられます。

かつて、山で火を起こすとき、これを乾かし、つけ木として使った人もいたのではない

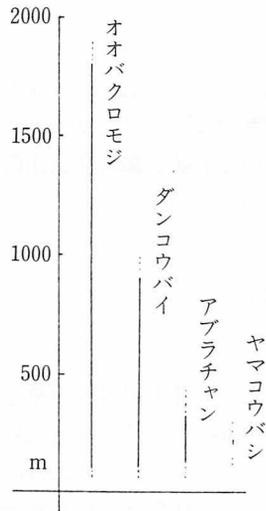
かと思われます。

## 県内のクロモジ属

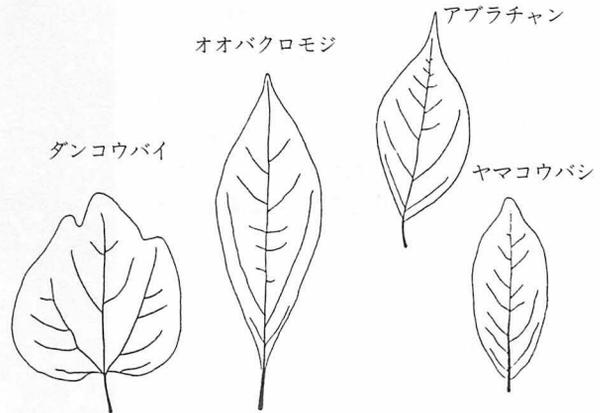
アブラチャンは、クスノキ科クロモジ属の植物です。日本にはクロモジ属の植物はクロモジ、ヒメクロモジ、ウスゲクロモジ、ケクロモジ、ダンコウバイ、カナクギノキ、ヤマコウバシ、シロモジ、アブラチャンの9種があります。石川県に分布するのはこのうちクロモジの変種オオバクロモジとダンコウバイ、ヤマコウバシ、アブラチャンの4種です。このうちアブラチャンとダンコウバイは加賀地方に分布し、能登ではまだ確認されていません。垂直分布では、ヤマコウバシとアブラチャンが丘陵帯に、オオバクロモジとダンコウバイは丘陵帯から山地帯上部まで分布しています。

現在わかっている白山麓のクロモジ属の垂直分布域は、下記のとおりです。

ヤマコウバシ	180m～190m
アブラチャン	110m～310m
ダンコウバイ	100m～920m
オオバクロモジ	120m～1800m



白山麓のクロモジ属の垂直分布



クロモジ属の葉の特色



越冬前のアブラチャンの花芽 (平3. 4. 6 吉野谷村)

## アブラチャンの分布

全国的には、関東地方以西の本州、四国、九州の丘陵帯から山地帯下部にかけて分布しています。県内では、加賀地方に広く分布しますが、生育環境が限られているうえ、元来の生育地の多くが最も人為の加わり易い里山の山裾という位置に当たるため、多くがスギ植林地、耕作地、道路などに利用されてしまい、現在白山麓では、鶴来町、河内村、鳥越村、吉野谷村、尾口村の手取川流域の峡谷

岩崖や山裾の崖地の限られたところにしかみられません。

白山麓の垂直分布の上限は、現在わかっている範囲では尾口村の女原地内では標高310m、下限が鶴来町白山町地内の標高110m辺りです。

## 生育環境

アブラチャンの生育環境は、山裾と言われる山の斜面の下部で、溪流沿いに当たるやや湿った場所です。ここは、植生の上ではケヤキ林が見られる場所ですが、ケヤキ林のあるところに必ずしもアブラチャンがあると言うものでもありません。かつて、ケヤキ林があったと思われるところにはアブラチャンの外にエゾエノキ、バイカウツギ、ヤマブキ、ツルマサキ、ケンボナシ、クマノミズキなどが見られ、アブラチャンは、これらと共に群落を構成することが多かったようです。

## 特徴

アブラチャンは、雌雄異株で、高さが3m～4m位になる落葉低木で、アンズやウメのように葉がのびる前に開花します。まず一本立ちになることはなく、萌芽が次々と伸びて何本もの木が株状になって生育しています。このような姿からムラダチ（群れて立つの意）という方言が全国あちこちで使われています。

白山地域では、ヤマコウバシが少ないので、アブラチャンの特徴をダンコウバイやオオバクロモジと比較します。花は、ダンコウバイより小形で色は淡く、枝も細いので全体として優しい感じがします。開花の時期はダンコウバイがまず最初で、少し遅れてアブラチャンが続き、最後にオオバクロモジが開花します。最初に開花するダンコウバイのことを吉野谷村の一部ではマンサクと言っています。アブラチャンの葉は、円形または楕円形でオオバクロモジよりやや小さく、葉の先が尾状に細まります。ダンコウバイの葉は、先がやや深く三つに裂けます。実は、ダンコウバイやオオバクロモジが液果であるのにたいし、アブラチャンは堅い皮をまとった球果で、熟すると不規則に裂けます。匂いは、ダンコウバイやオオバクロモジと多少違いますが特徴ある芳香をもっています。



株状に生育するアブラチャン（平3. 12. 1 吉野谷村）

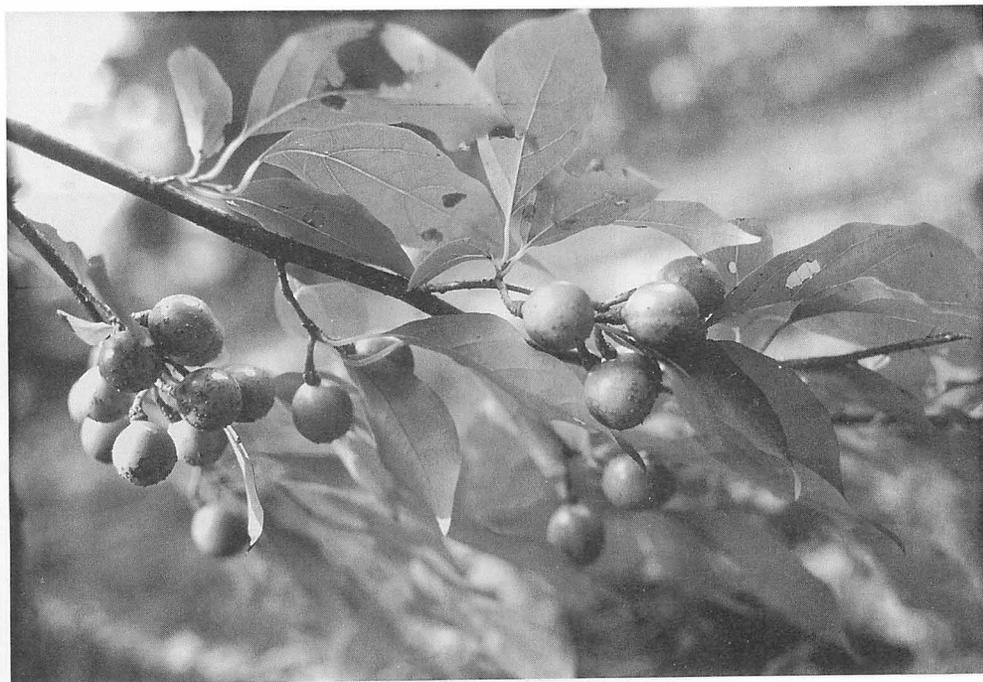
## 用途

かつて、油採取のための重要な徳用樹であったようですが、現在白山麓ではまったく利用されていません。朝鮮半島では、日本の椿油のように婦人の髪油に用いていたとする文献があります。また地方によっては“わかんじき”の材料として利用されていたと聞きますが、白山麓では、かんじきの材料にはオオバクロモジが利用されておりアブラチャンを使ったという記録はないようです。現在使われている“かんじき”の材料は、おもにオオバクロモジとタケ類であると言われています。

しかし、河内村から吉野谷村にかけてかなり密集した分布を示すこのアブラチャンについてもきっと利用の歴史があったと思われます。

※チャン（瀝青）コルタルから揮発成分を蒸留した残りかすで黒色ないし濃茶褐色の粘質物

<白山自然保護センター>



結実したアブラチャンの雌株（平2．8．15 河内村）

# 白山の植物に寄せて

清水 建美

今年、1992年は白山国立公園発足30周年記念の年です。折から、エコーラインや展望歩道など白山登山道修復のための環境調査や工事計画が進んでいる一方、山麓のリゾート開発が取沙汰されています。白山の自然環境の保全と利用のあり方に関し、より一層将来を見据えた総合的な展望が必要なときであると思われまふ。

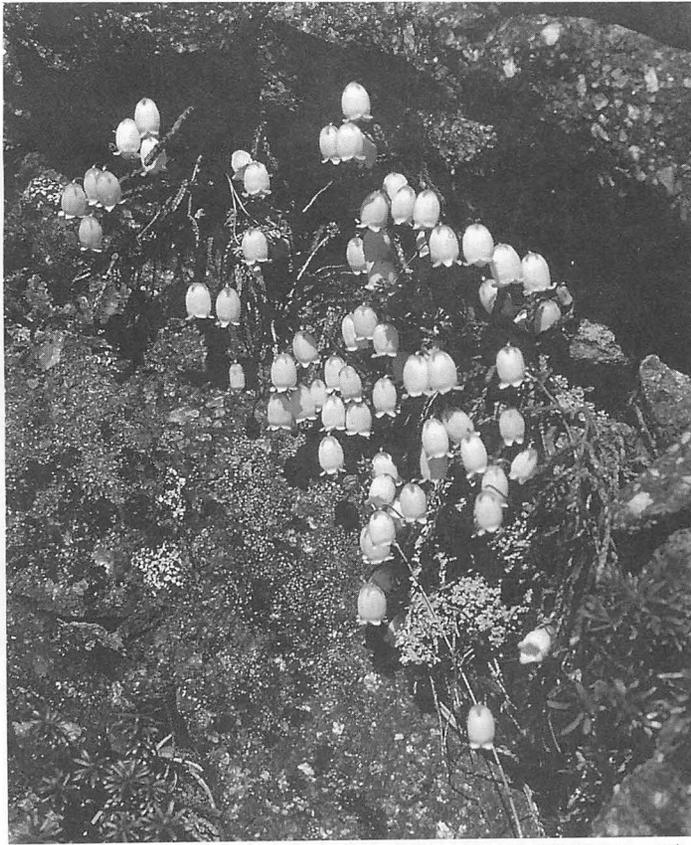
私は、学生時代を含めずい分以前に3回ばかり白山に登ったことがあります。本格的に白山の植物を調べたことはありません。ところが、昭和63年以来、金沢に住むことになって、平成元年に1回、2年に4回、3年に2回とこのところやや足しげく白山に通うことになりました。平成2年からは白山自然保護調査研究会にも参加させていただいていますし、昨年は白山地域自然保護懇話会会員に指名されました。こんなわけで私にとっては白山とのおつき合いは漸く今始まったばかりでなのです。ここでは、白山の植物をめぐる隋想を綴ってみることにしたいと思います。

## 白山の植物—初期の研究

白山といえば、誰でも頂に白雪を冠する山の雄姿を思い浮かべます。白山は日本の三名山の一つ、古くから信仰の対象であり、比較的登り易いためか、高山帯の植物採集の記録は古くからあります。すなわち、1881年すでに東京大学の矢田部良吉が採集に訪れていますし、1893年には市村塘が植物学雑誌に短報を寄せています。市村は、この年に採集され寄贈された標本を検定し、「何処ノ高山モ大抵相似オルモノ」と述べ、クルマユリ・マヒヅルソウ・イハクマ (=チングルマ)・ナンキンコザクラ・イハカガミ・ルイヨウショウマ・ミヤマカタバミ・イワツメクサ・アカモノ・イブキトラノオ・ウスユキソウ・キツリフネ・ミヤ



白山山頂部の植生景観 (平元. 8)



白山高山帯の植物イワヒゲ (昭60. 7. 29)

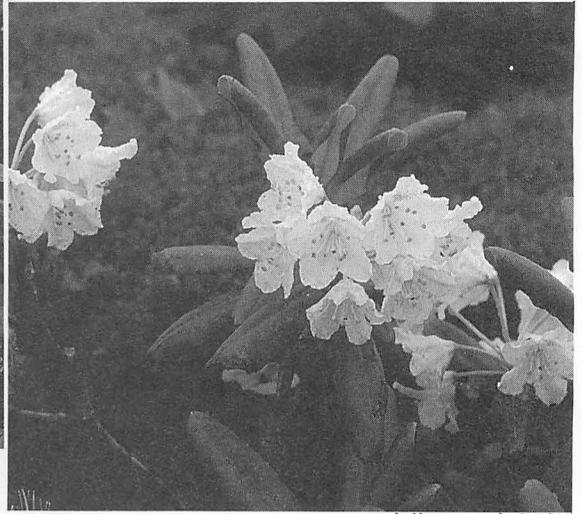
マハンショウヅル・アキノ  
 キリンソウ・キョウガノコ  
 (=シモツケソウ)・ヒカゲ  
 カズラ(=ヒカゲノカズラ)・  
 ミヤマメシダ・ハイネズ(=  
 ホンドミヤマネズ)などが  
 あることを報告しました。  
 次いで、1899年、同氏は植  
 物学雑誌13巻に4回に分け  
 て「加州白山及其附近採集  
 植物目録」と題し、コケ類  
 を除く陸上植物のすべての  
 種類を学名とともにリスト  
 アップしました。これが、  
 白山の高等植物目録の第1  
 号です。このリストの中で  
 注意したいのは、フジマツ  
 (=カラマツ)(上走一現在  
 上走がどこであるかよく分  
 かっていません)、コウヤマ  
 キ・シラビソ・コメツツジ  
 (上走)、トウヤクリンドウ  
 (上走・弥陀原)・コケリ  
 ンドウ(御前室堂)などです。

林業関係者の間では、天然カラマツは白山が西限ということになっています。ここ何年か、石川県地域植物研究会は、石川県樹木分布図集の作成を手がけていますが、この会のどのメンバーも自生のカラマツはみていないとのこと。コメツツジもこの会のミーティングで話題になりました。金沢大学の標本庫には白山室堂、白山～中宮、高三郎山からの3枚の標本がありますが、オオコメツツジの貧弱なもののようにもみえるので精査が必要だと思われます。その他は、コウヤマキにしてもシラビソにしても、また、トウヤクリンドウにしてもコケリンドウにしても、まちがえようない植物と思いますが、「石川県植物誌」(1983)には記録されておらず、最近みたという話も聞きません。

第二の白山の植物目録は、志村鳥嶺の「加賀白山植物目録」(1909)と思われませんが、実見していません。第三は、石川県天然記念物調査報告第二輯白山(1927)所載の「白山植物目録」です。これは、山麓帯以高の高等植物の和名と学名のリストです。ここには、上記のコケリンドウやトウヤクリンドウのほか、キバナシャクナゲやチシマゼキショウなどが加わっている一方、カラマツやシラビソは消えています。このリストのキバナシャクナゲがどこでとられたものかは分かりませんが、報告集自体が別山には言及していないことから、白山本体のものと思われ。現在、白山本体にはキバナシャクナゲは発見できず、「石川県樹木誌」には、別山のK.Demura採集の標本がただ1枚金沢大学薬学部にあると記されているのみで、理学部の標本庫には1枚も収められていません。それにしても、キバナシャクナゲは日本アルプスでも八ヶ岳でも、ハイマツのあるところ必ずといってよいほど群生しているのに、白山にはどうしてないのでしょ。一方のチシマゼキショウは、「石川県植物誌」にもなく標本もみることはできません。キバナシャクナゲは白山の絶滅



乗鞍岳のキバナシャクナゲ  
白山では絶滅危惧種であるが、  
北アルプスでは普通に見られる  
昭61.8



ハクサンシャクナゲ  
(昭61. 7. 29)

危惧種、チシマゼキショウは白山からの絶滅種といえましょう。

第四の植物目録は、同じ石川県天然記念物調査報告第五輯の「白山植物誌目録」(1929)です。この報告書は別山を主としたものですが、目録は別山を含めて白山全域が対象となっています。ここでは、上に言及したコケリンドウ・トウヤクリンドウ・キバナシャクナゲ・コメツツジ・チシマゼキショウのほかチャボゼキショウやタカネスミレが目をはきまします。両方ともに、私は白山ではみたことはありませんし、あるという話を聞いたこともありません。

## 最近の主な植物の研究

白山自然保護調査研究会では、昨年来、白山の文献目録作成をめざし、学問分野ごとに文献カードを作成中です。私は、植物関係を担当していますが、その文献カードに従って、以後1970年までの高等植物のフロラ関係の文献を列記してみましよう。

- 1943年 白山植物採集記 (矢頭猷一)
- 1954年 白山植物相と越前山地植物相との関係 (寒蟬義一)
- 1955年 白山のヤチラン (里見信生)
- 1961年 Geobotanical studies of mt. Hakusan (正宗巖敬)
- 1962年 ミヤマハナワラビを白山で採集した (正宗巖敬)
- 1969年 植物分類地理よりみた白山 (橋本光政・里見信生)
- 1970年 白山の新植物と初発見の植物 (里見信生・橋本光政)

これがすべてではないにしても、その数は以外に少いようです。上記の文献中、正宗(1961)の論文は、英文34頁にわたっていますが大部分は地形・地質・植生関係の記事となっていて、分類・地理関係は最後の2頁の西限植物83種のリストだけとなっています。1966年か

ら3ヶ年にわたり、白山学術調査団による地質・植物・動物・鳥類・気象各分野の調査が実施され、結果は1970年2月に「白山の自然」(全395頁)として出版されましたが、フロラ関係の報文は、上記最後の「白山の新植物と初発見の植物」(本文3頁+白黒写真4頁)1篇が収められているにすぎず、植物目録も入っていません。その意味で特筆されるのは、昭和43年度白山資源調査事業中間報告書(7~46頁)掲載の「植物分類地理よりみた白山」(橋本・里見)の報文で、孔版印刷とはいえ極めて貴重です。ここには白山の植物帯ごとのフロラが記述され、1321種類(種数ではない)の高等植物のフロラ統計が示されています(後述)。

最新の本格的な植物目録は、橋本光政・里見信生(1970、71、73、76)による「白山の植物(1)~(4)」です。これは、単なる和名のリストではなく、学名・産地・標本の引用があってスタイルとしては完璧な目録であり、当然信頼に足るものですが、残念なことに、最も大きなグループである双子葉植物が未刊のままとなっています。白山国立公園の30周年を機に組織的な植物調査を実施し、まず、植物目録を完成させることを望みたいと思います。

1970年以降、県レベルでは「石川県樹木誌」(1977)や「石川県植物誌」(1983)が相次いで出版されていますが、白山の植物研究は、基礎的なフロラの完成を飛び越して、個々の種の議論や種の動態の解明へとその重点が移ってきたように思われます。その主な研究は次のようなものです。

1974年 白山のエゾスグリ(橋本光政)

—— 白山におけるハクサンコザクラの個体数の推定(和久田昌利ほか)

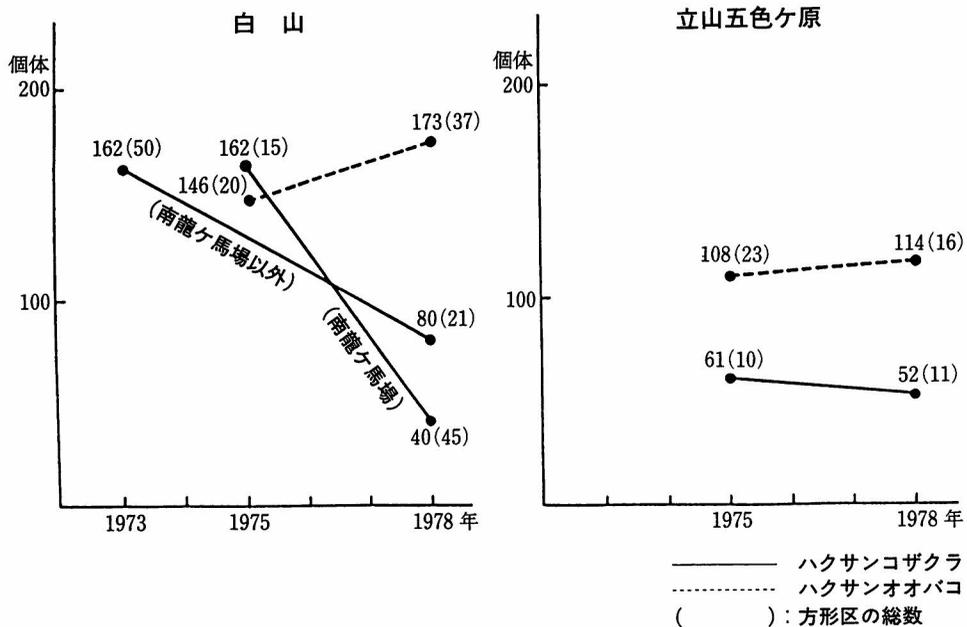
1975年 白山におけるハクサンコザクラの個体数の推定(第2報)(芦原孝治ほか)

—— 白山と立山におけるハクサンオオバコの個体数の推定(大野政信・里見信生)

1978年 白山を分布の西南限とする植物(里見信生)



白山では減少傾向がみられるハクサンコザクラ  
(平元、8)



白山と立山におけるハクサンコザクラとハクサンオオバコの平均個体数の推移の比較 (大野、里見 1979)

1979年 白山と立山におけるハクサンコザクラとハクサンオオバコの個体数の推移 (大野政信・里見信生)

1984年 白山におけるハクサンコザクラの個体数 (芦原孝治ほか)

1985年 白山を分布の西限もしくは南限とする植物 (米山競一)

1986年 白山山系のトリカブト属 (門田裕一)

—— 両白山地のトリカブトとハクサントリカブトの実体について (門田裕一)

それにしても、白山の植物の調査や研究はそれほど密度高く行われているとは思えませんので、白山の自然保護や研究をリードする石川県白山自然保護センターや県内の、植物研究家の奮起を特に期待したいと思います。

## 白山の植物の特徴

前述のように、白山の高等植物目録の出版は、完了していませんので、全体の植物リストから特徴を探るのはむずかしいと思います。その意味では、白山のフロラ統計に関する記事は、橋本・里見 (1969) が唯一のものでしょう。それによると、白山全体には1321種類、高山帯には226種類が記録されています (表1)。この表には植物帯ごとに独立に出現植物の種類数を挙げています。したがって、2つ以上の植物帯に出現するものもあつたりして合計種類数が1321になるわけではありませんが、白山の高山植物は200程度と推定されます。県とか市町村とかの行政区割によるものほともかく、ある一つの大きな山のフロラ調査というのは意外に少ないもので、白山のこの種類数が多いのか少ないのかにはわかりません。高山植物だけを比べれば、立山などより白山は少ないといわれています (米山、1985)。比較の対象としてはそれほどよいとは思えませんが、標高848mの比叡

山は1山で1113種(「比叡山—その自然と人文」1961)、標高2933mの白馬・後立山連峰が1518種(高橋ほか1969)という数字に比し白山全体の種数はそれほど少ないとも思われません。

一般に固有植物の多寡は、当該地域のフロラの特徴となります。しかし、白山には遺存固有とみられる種も新固有とみられる種も全くなく、わずかにハゴロモヤマブキショウマ・シダレブナ・フタエツリガネツツジ・シロバナサイゴクミツバツツジなど、品種レベルの植物が報告されているにすぎません(里見・橋本、1970)。地史的にみれば、白山は更新世中期から完新世初期(約1万年前)にかけて、古白山火山および新白山火山の噴火によって山頂部は噴出物におおわれ、加えて熱雲や地熱も影響し、たとえあつた



南竜ヶ馬場のニッコウキスゲ  
(昭55. 8. 5)

としても高山植生はほとんど喪失したと考えられます。ハイマツをはじめ多くの高山植物は、以後おそくとも縄文海進(約6000年前)の頃までの数千年の間に山頂部に再び新しい高山帯を形成したと思われます。それから現在までのせいぜい1万年という時間は、植物の分化にとってはあまりにも短かすぎる時間なのです。私はまだ白山の生いたちには詳しくありませんが、これが白山に固有種の存在しない理由だろうと勝手に考えています。

白山は最高峰の御前峰が標高2702.2m、高度差にして約400mの高山帯をもっています(正宗、1961)。その地理的な位置は、高山帯をもつ日本最西端の高山です。したがって、当然のことながら分布の西限あるいは南限となる植物は多くなっています。最近、米山(1985)は、白山を分布の西限もしくは南限とする植物として、シダ植物はスギカズラほか3種、

### 白山の植物帯ごとの高等植物の種類数

	羊歯植物		裸子植物		双子葉植物		単子葉植物		総 計	
	種数	%	種数	%	種数	%	種数	%	種数	%
白 山 全 体	118		19		891		293		1321	
高 山 帯	13	11.0	3	15.8	156	17.5	54	18.4	226	17.1
ダケカンバ帯上部と高山帯	20	16.8	7	36.8	221	24.8	92	31.3	340	25.6
ダケカンバ帯	40	33.9	12	63.2	311	34.9	107	36.5	470	35.6
ブナ帯	55	46.6	11	57.9	379	42.5	106	36.2	551	42.5
下部夏緑広葉樹帯	77	65.3	9	47.4	547	61.4	143	48.8	776	58.7

橋本・里見(1969)から

裸子植物2種（オオシラビソとハイマツ）、単子葉植物33種（ホソバタマミクリほか）、双子葉植物73種（ドロノキほか）計111種を挙げています。これを少し大胆に高山植物・亜高山植物・低山植物に分類しますと、それぞれ、77種、28種、6種となります。固有種不在で特徴を出せなかった白山は、多くの植物の分布圏の西限をになうという点で大きな役割を果たしているのです。それはただ単に、高山植物だけではなく、亜高山植物にも低山植物にもその役割が及んでいることとくに注目したいと思います。同じ標高にあるブナ林という植生であっても、以西の山々にはない要素を白山がもっていると考えられるからです。それは何なのか、白山の研究者の方々に宿題をさし上げたいと思います。

## エピローグ

このところ、地球サミットとか絶滅危惧種の保護とかワシントン条約といったニュースが盛んに新聞紙上を賑わすようになりました。種の保全に関する問題提起は、私自身すでに昭和40年代から行っています（「自然保護を考える」共立出版、1973）ので、まさに“漸く”というのが実感です。民間からの問題提起と行政の動きの間には実に20年ものギャップがあります。ところで、種の保全の根拠は普通、遺伝子資源の保全にあるとされています。となると、白山のように固有種をもたない山の植物は、種の保全には深刻な問題とはならないので自然保護上問題はないという議論も生まれてきます。しかし、たとえ1万年にしろ他の山々と隔離されてきた白山の亜高山や高山の植物の多くが遺伝子レベルに至るまで全く同じであるといえるでしょうか。他の山と盛んに遺伝子の交流を行っている植物種はともかく、白山に育ち白山で世代交代をくり返して来た植物たちは、ヒトがたかだか1万年の間に無数の民族や部族をつくり上げたように、肉眼では分からないにしても白山



チブプリ尾根のオオシラビソ  
(昭57. 9)

生れ白山育ちの特性を備えているにちがひありません。私はその実体の究明こそが、これからの植物地理学の重要な課題であると思っています。この観点から、植生の復元といいながら他の山から種子を持ち込み、移植をすることはたとえ同種の植物であっても行うべきことではないと思います。それは、パスポートなしで外国人の入国を容認するに等しいのです。種の保全は、今や“分類学的な種”の保全としてのみならず地方的変異を包含した真の意味の遺伝子資源の保全として捉えられなければなりません。

はじめに、白山の研究史をひもときながら、すでにいくつかの植物が白山から姿を消していることを指摘しました。一方、詳しい個体数の調査によって、たとえば、ハクサンコザクラが減少しつつあるという指摘があります（大野・里見、1979）。上記のような自然保護の視点からすれば、白山植物の目録の作成は急がねばなりませんし、白山植物の遺伝子レベルにおける特性の究明にも急ぎ着手しなければなりません。

ところで、遺伝子資源の保全という自然保護の論拠は、多かれ少なかれ経済原理に基づいています。現在は有用でなくても、潜在的な有用な資源という見方です。それは確かにその通りですが、最近発行された環境庁国立環境研究所地球環境研究センターの「地球環境センターニュース」第2巻第8号（1991年11、12月号）に次のような文章がありました。大へん含蓄のあることばだと思いましたので引用したいと思います。「野生生物種の保護に当っては、人間にとって有用性や有害性の観点のみでなく、人類と同じくすべての野生生物種は地球上で生じた長い進化の産物であり、いったん絶滅すれば再生することが不可能であるとの畏敬の念と共同体意識を基本とし、生物種は全て、少なくとも人為的に絶滅させてはならないことを基本原理とする必要があるのではないかと思います。」

「しかしながら、推定で1000万種あるいは3000万種もの野生生物が地球上に存在している



といわれているのに対して、科学的に識別されている野生生物種の数はずか150万種程度でしかありません。生物種の多様性の保全を有効に推進するためには、まず何よりも生物種の多様性の現状と変動を正確に、かつ長期的に調査することが必要であります。」

これらのことばは、白山の植物たちにとってもそっくりそのまま当てはまるものと思われます。

<金沢大学理学部>

白山を西限とするオオシラビソの球果  
(平元、8)



白山比咩神社の老杉（鶴来町）

スギは、数百万年前に日本列島に生まれ、氷河時代を生き残ってきた日本固有の植物といわれています。従って、昔からのスギは神社の神木として崇敬されるとともに、人間生活には不可欠の資材として存在してきました。白山麓では標高600メートル位まで人工植栽され、標高1,000～1,300メートルのブナ帯に天然分布しています。

当地におけるスギは桑島スギと総称され、耐雪性の強い品種として知られています。明治の後期に、我が国では初めて勾配の強い傾斜地において階段造林法が行なわれました。また、このスギは県内の積雪地帯に広く植林されています。

白山麓の巨木は、奥地には少なく神社境内林など人との繋がりのある所に生育しています。それ以外の所に残らなかった理由の一つは、積雪が多量で急傾斜地が多いこと。二つは当地で広く分布していた<sup>ナギバ</sup>雑畑はブナ帯に多く、林業地と競合していたこと。三つは薪炭生産が増大し、用材生産は従であったこと。そして昔から当地方には、七木の制度<sup>\*</sup>がなく有用大径木は、生活資材や加工材として容易に利用されてきたこと等が考えられます。

※七木の制：加賀藩が樹木資源を維持管理するため、マツ、スギ、ケヤキ、ヒノキ、モミクリなど七種（年代によって種類は少し異なる）を指定し、保護した制度

## 鶴来町にはスギの巨木が多い

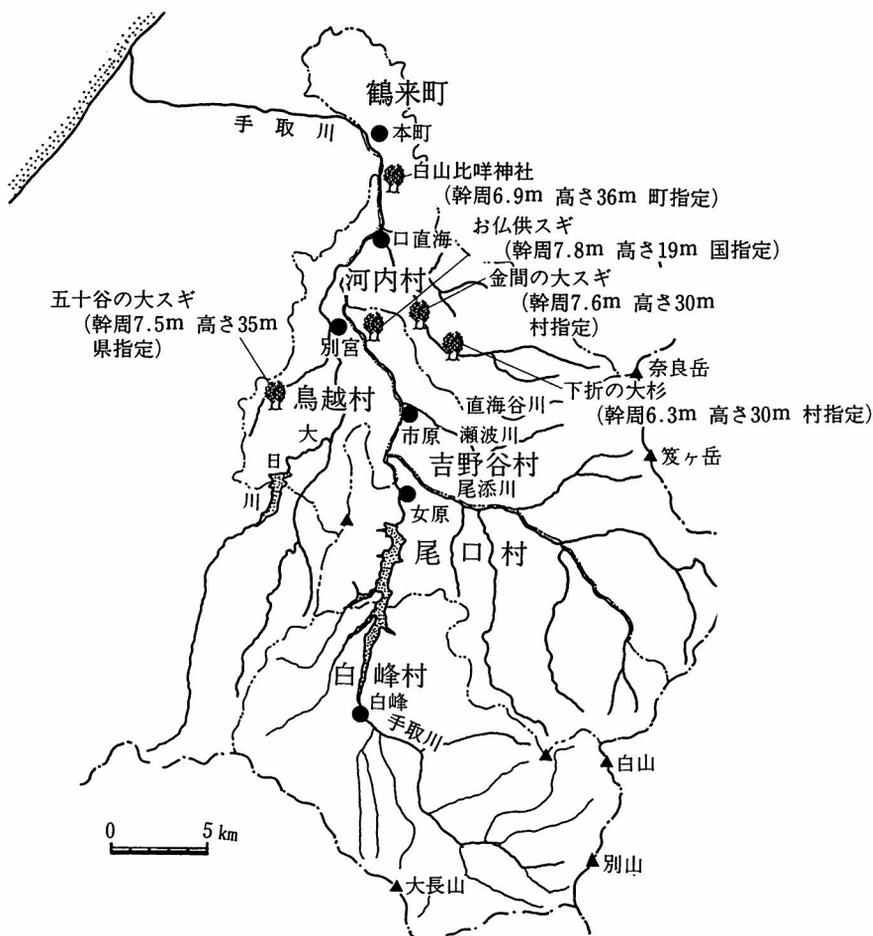
町村別（次頁）にみると鶴来町に特にスギの巨木が多いが、これは白山比咩神社の社叢

林が巨木林で構成されているということによっています。また、単木ですが吉野谷村の“お仏供スギ”（国指定天然記念物）は、樹形と歴史的な物語で親しまれており、鳥越村の“五十谷の大スギ”（県指定天然記念物）は、天然スギのような下枝があり、なかなかの貫禄があります。他の巨樹も同様に、それぞれ特徴があり鎮守の森の主要木となっています。巨樹を見上げると何か不思議な力が感じられます。読者の皆さんにも巨木ウォッチングをおすすめしたいと思います。

<日本技術士会会員>

### 白山麓のスギの巨木数及び主要木の状況

	鶴来町	河内村	吉野谷村	尾口村	白峰村	鳥越村
本数	42本	14本	3本	2本	8本	7本
スギの名称	幹周	樹高	所在地	天然記念物指定年月日		
お仏供スギ	7.0 <sup>m</sup>	19 <sup>m</sup>	吉野谷村吉野 工芸の里	昭13. 8. 8(国)		
五十谷の大スギ	7.5	35	鳥越村字五十谷 八幡神社	" 50. 10. 10(県)		
白山比咩神社の老杉	6.9	36	鶴来町三宮町 白山比咩神社	" 29. 11. 1(町)		
金間の大スギ	7.6	30	河内村金間 金満神社	" 43. 5. 1(村)		
下折の大スギ	6.3	30	" 下折 下折神社	" 43. 5. 1(村)		
県環境部「巨樹・巨木調査」等より この調査では胸高直径100cm以上の木を巨木として扱っています						



白山麓の主要なスギの巨木分布

## たより

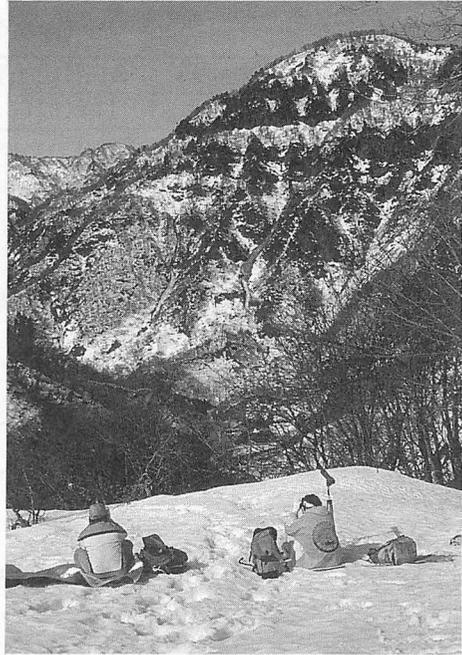
○ 本号は、特に白山の植物について編集しました。白山麓に分布するかわった名前の“アブラチャン”について、米山所長に実地調査をふまえた結果と分りやすい解説をしていただきました。本論からは白山麓の人と植物の関わりについて考えさせられます。

また、清水建美金沢大教授には白山の植物研究の現状と展望についてまとめていただきました。白山の植物相や植物分布の研究課題が提示され、今後の白山植物の研究方法の一側面も教示していただきました。キバナシャクナゲやチシマゼキショウなど絶滅種（又は危惧種）と指摘された種類については、その原因追究などが急がれます。

また、田中敏之氏には、白山麓のスギの巨木をとりあげてもらいました。次号にはブナ科の巨木について記載する予定です。

○ 3月3～5日、カモシカ調査のため、蛇谷に入りました(右写真)。本年は雪も少ないため(中宮展示館前120cm、中宮温泉上部で150cmの積雪)カモシカの数のカウントする時には観察しにくくて困りましたが蛇谷一帯で58頭を確認できました。

(林 哲)



蛇谷流域調査(中宮道から)

## 目 次

ハクサンイチゲ	米山 競一	1
白山麓のアブラチャン	米山 競一	2
白山の植物に寄せて	清水 建美	6
白山麓の巨木(1)ースギー	田中 敏之	14
たより		16

はくさん 第19巻 第4号(通巻82号)

発行日 1992年3月20日(年4回発行)  
編集発行 石川県白山自然保護センター  
石川県石川郡吉野谷村木滑  
〒920-23 Tel 07619-5-5321  
印刷所 株式会社 橋本 確文堂